OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	郵便ポストのアフォーダンスについての一考察
Author(s)	豊泉, 俊大
Citation	共生学ジャーナル. 2020, 4, p. 80-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75387
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

郵便ポストのアフォーダンスについての一考察

豊泉 俊大*

A study of the affordance of post boxes

TOYOIZUMI Toshihiro

論文要旨

アメリカの心理学者ジェームス・ギブソンが提唱したアフォーダンスの概念にたいする古典的な批判のひとつに、人工的、社会的なものには適用できないとするものがある。この小論は、その批判に応ずるべく、アフォーダンスの概念をいまいちど精査したうえで、ありうべき回答を探るものである。まず、アフォーダンスの概念の根底にある、ギブソンの基本の考えを確認する。ついで、アフォーダンスの特異性をしめすために、それを傾向性として捉える。最後に、アフォーダンスの概念にたいする批判のどれもが、ギブソンの理論を不用意に読むことから生ずるものであることをしめす。この小論は、これまで不当に狭められてきた、ギブソンのエコロジカルな心理学説を、正しく再評価するものとなろう。

キーワード　ジェームス・ギブソン、アフォーダンス、郵便ポスト、知覚

Abstract

One of the classical criticisms against the concept of affordance advocated by the American psychologist James Gibson is that it cannot be applied to artificial or social entities. In order to respond to the criticism, I scrutinize the concept of affordance and find reasonable answers. I begin by describing the basic ideas of Gibson underlying the concept of affordance. I then consider affordance as a kind of disposition to show its peculiarity. Lastly, I demonstrate that all of the criticisms are derived from a careless reading of Gibson's theory. This paper will rightly reevaluate the Gibson's ecological theory hitherto suffering from an undue underestimation.

Keywords: James Gibson, Affordance, Post boxes, Perception

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程； eyotozm@gmail.com

はじめに(1)

私たちは意味に囲まれて生きている。いかに些細なものといえども、意味と無関係ではありえない。世界がもし無意味なものばかりで溢れていたならば、私たちはそれに目もくれなかったろう。世界は意味を具えていればこそ、私たちの関心を惹き、視線を誘いもする。多様な生の営みもまた、かように意味を具えた世界であればこそ、可能になったはずである。したがって、意味ある世界は価値ある世界でもある。

しかし、そうした意味や価値についてひとたび思案をめぐらすならば、私たちはその捉えがたさにたちまち戸惑ってしまう。というのも、意味や価値そのものの存在は、手で触れたり、目で見たりして、たしかな感触でもって捉えるわけにはいかないからである。意味や価値は、一個の事物が存在するのと同じように存在するわけではない。そのことは、例えば、同一の事物がひとによって、さまざまな意味や価値を帯びて現れるということからもすぐさま観取されよう。

意味や価値の捉えがたさに直面して、それを私たちの経験へと還元してしまうことは容易い。すなわち、意味や価値は私たちによってただ経験されているにすぎない、ひとはいつでもこのようにいうことができる。しかし、このような考えかたによっては、ことの実情はけっして十全に捉えられることはないだろうし、経験とは本来、経験する主体に応じて、さまざまにことなりうるわけであるから、やがては行き場のない主観主義ないし相対主義を帰結することにもなろう。意味や価値についての問いは、たんなる理論上の関心事にとどまらず、私たちがどうやって共に生きればよいのかという問いへとつうじているのである。

私たちが日ごろ慣れ親しんでいるものでありながら、捉えようとすれば、するりと指をすりぬけていく意味や価値。そうした意味や価値について、私たちはどのように考えるべきか。

アメリカの心理学者ジェームス・ギブソン（James Gibson 1904-1979）は、アフォーダンス affordance なる概念によって、意味や価値について考えることを提案している。アフォーダンスとは、英語の動詞 afford を名詞化した、ギブソンによる造語である。この語には、意味や価値を、経験の主体た

る私たちが、本来無意味、無価値であるはずの世界に押しつけるものであるとする、従来の考えかたへのギブソンなりの反省が込められている。ギブソンによれば、意味や価値は、私たちが世界に押しつけるものであるどころか、むしろ、世界のほうが私たちに与えてくれる afford ものである。ギブソンは、意味や価値がけっしてたんに経験されるだけのものではなく、世界に実在するものであること、また、経験の主体たる私たちが拵えるまでもなく、世界のただなかで知覚されるものであることを主張した。

この意味や価値についての新たな理論、すなわち、アフォーダンスの理論は、いまやギブソンそのひとが専門としていた心理学の領域を越えて、哲学や倫理学、さらには、デザインやアートの領域にまで応用され、さまざまな展開を見るに至っている。そのことは、アフォーダンスの理論の妥当性が、すくなからぬひとによって認められたことをしめしていよう。しかし、認められたその分だけ、激しい反論をも招いてきた(2)。なかでも、ギブソンがアフォーダンスの理論を、人工的、社会的な事物に適用したことは、おおくのひとによって批判されてきた(3)。

ギブソンは、郵便ポストのアフォーダンスを語る。ギブソンによれば、郵便ポストは手紙を郵送することをアフォードする。これは、郵便ポストとは、手紙を投函することのできる letter-mailing-with-able ものであるというに等しい(4)。一見、ごく当然のことがいわれているようでもあるが、郵便ポストの意味や価値にアフォーダンスの理論が適用可能であるかという話になると、ことはそう単純ではない。

どのような批判があったかについては本論において詳述するが、ギブソンが環境および動物という枠組みのもとでアフォーダンスを語ったことが、こうした批判に拍車をかけることになった。ギブソンの主張を不用意に解するかぎり、そうした枠組みはきわめて粗野な道具立てに見える。郵便ポストについていうならば、それは人間に固有のものであり、動物一般とは無縁である。動物についての理論が、そもそも何か人間について教えてくれるものでありうるだろうか。こうした疑念は、当然生ずることになる。

しかし、そこにはおおくの誤解と偏見とがふくまれており、ただちに正当なものとして扱うわけにはいかない(5)。アフォーダンスの理論は、意味や価値について、ひいては、私たちが共に生きるということについて、すくなからぬ示唆を与えてくれるものであり、真摯な検討に値すると、私にはおもわ

れる。そこで、この小論では、アフォーダンスの理論の要諦をあきらかにしたのち、郵便ポストのアフォーダンスにかんするギブソンの主張が擁護可能であるかどうか、擁護可能であるとすれば、どのようにして可能であるか、検討することにしたい。

1

アフォーダンスとは何か、と問うことからはじめたい。アフォーダンスについて、その意味するところを正確に見定めるためには、私たちは何よりまず、ギブソンの知覚理論を見ておかなくてはならない。

ギブソンの知覚理論の枢要な点は、私たちの知覚が語られるところの枠組み、すなわち、知覚する私たちの心の在りかた、知覚される世界の在りかたを捉えなおしたところにある。

ギブソンによれば、これまでの知覚理論はみな、フランスの哲学者ルネ・デカルト （René Descartes 1596-1650） による物心の二元論をうけいれたうえで、議論を進めてきた(6)。すなわち、いっぽうに思惟実体としての精神、たほうに延長実体としての物体という、互いにまったく相容れぬものを立論の基底に据えたうえで、知覚を担うもの subject としての私たち精神が、いかにしてそれに相対するもの object としての物体ないしそのような物体からなる世界を知覚しうるか、と問うてきた。しかし、精神、物体を峻別する仮定そのものが、この問いに答えを与えることを禁ずる。というのもそれは、けっして架けられることのない橋を架けようとする試みに等しいからである(7)。

かくしてギブソンは、これまでの知覚理論をまるごと棄却する。まるごと、というのは、知覚を語る枠組みそのもの、すなわち、これまでの知覚理論が前提とする存在論を斥けるということである。私たちは思惟するばかりの純粋な精神として存在するわけではないし、私たちをとりまく世界も、ただただ空間に広がりを有するだけの物体からなるわけではない。精神–物体の二項に替えて、ギブソンは動物–環境の二項を、みずからの知覚理論の基本の枠組みとして採用する。

ギブソンがいう動物とは、野生動物をふくめた、生きて活動するもの the animate 一般のことである。そこには当然、人間もふくまれる。とはいえ、

人間に固有の在りかたが見過ごされているわけではない。デカルトふうの精神から出発するかぎり、私たちの知覚が世界へと達することは望めそうにない。そこで、私たちの心を、デカルトとはちがうしかたで考えよう、というわけである(8)。

動物–環境の二項について顕著にいいうることは、ただいっぽうだけに言及することがほとんど意味をなさないということである。すなわち、動物のいない環境は環境とはいわれず、環境なしに、動物は生きて活動することができない。「動物と環境というふたつの語は、切りはなしがたい対をなしている」 （Gibson 1986:8） と、ギブソンはいう。

動物が生きて活動するものであるということは、環境がそれを可能にするものとして存在しているということである。そうでなければ、動物が生きて活動することなど、できうるはずがない。また、ギブソンによれば、「すべての動物は多少とも、知覚するものであり、行動するものでもある」（Gibson 1986:8） 。いいかえれば、動物に固有の活動の在りかたは、知覚することおよび行動することである。とすれば、環境はすくなくとも、動物にとって知覚されうるもの、動物がそれにたいして行動しうるものとして存在しているということになる。

行動するとは、でたらめに動くことではない。ふるまうこと、状況にあわせて動くことである。状況にあわせて動くといっても、それは機械のように、予め定められたプログラムにしたがって動くことではありえない。というのも、状況は刻刻と変わりゆくものであり、その変わりかたも一様ではないからである。したがって、行動は知覚と共に進行すると考えなくてはなるまい。知覚がはたらいているからこそ、私たちはさまざまな状況にたいして柔軟に応ずることができる。これは、裏からいえば、実際に行動を遂行するにさきだって、みずからがなしうること、すなわち、行為の可能性を、私たちが環境のうちに知覚しているということにほかならない。そして、この行為の可能性こそが、ギブソンにあって、アフォーダンスと呼ばれる(9)。

ギブソンはいう、

> 「大まかにいって、事物のアフォーダンスとは、事物が提供する furnish もの、すなわち、事物が観察者(10)に与えるものである。」 （Gibson 1982b:403）

「アフォーダンスの理論は、ものを見ることが、いかにしてもののあいだを往来すればよいかを見ること、それらのものをもちいて何をするべきか、あるいは、何をするべきでないかを見ることにほかならないという主張を含意する。」（Gibson 1986:203）

「環境は動物がなしうることをふくんでいる。」（Gibson 1986:143）

私たちが生きて活動するものであるということから、環境の在りかたを、そして、そこに住まう私たち自身の在りかたをも考えていく探求方法を、ギブソンは生態学的アプローチ ecological approach とよぶ。生態学 ecology ということばは、「「家」を意味するギリシャ語の “Oikos” を起源としている」（河野 2003:103） けれど、ギブソンは、「家の見取り図や構造や調度品を記述」（河野 2003:103） するように、環境の在りかたを記述していく。

動物が住まう場所にたいして、生態学はニッチ niche の概念をあてると、ギブソンはいう。ギブソンは、ニッチという概念が、たんに生息地 habitat をいうものではないことを強調する。ギブソンはいう、「ニッチの概念は、動物がどこに生きるかより、いかに生きるかに注意をさしむける。」（Gibson 1986:128） あるいは、より手短に、「ニッチとは、アフォーダンスの集合にほかならない。」（Gibson 1986:128）

アフォーダンスとは、行為の可能性であり、それによって私たちが何かしらの行為をなしうるところのものである。したがって、ギブソンの主張にしたがうならば、動物の環境はさしあたり、そこに住まう動物たちにとっての、利用可能な手段(11)ないし道具のネットワーク(12)として存在しているともいえよう。

私たちは、考えこむばかりでみずからのうちに閉じこもる精神ではなく、みずからのそとへ、環境へと向かって、活動をくりひろげる存在であり、環境はそのような私たちにとって、そもそものはじめから利用可能なものとして存在している。

アフォーダンスの概念、および、アフォーダンスが実在するというギブソ

ンの主張はこのような枠組み、すなわち、かれがいうところの生態学の枠組みから導かれている。アフォーダンスを理解するにさいして、私たちはまずそのことを、心に留めておかなくてはならない。

> 「私たちは対象が何であるかを、物理学的物理学 physical physics によってではなく、生態学的物理学 ecological physics によって定義する。そして、だからこそ、対象はそもそものはじめから意味や価値を具えている。」 （Gibson 1986:139）

> 「アフォーダンスを知覚することは、これまでになんびとによっても見解の一致することのなかったしかたで、どうにかして意味がつけくわえられるところの、価値判断を伴わない物理学的対象を知覚する過程ではない。アフォーダンスを知覚することは、価値に富んだ生態学的対象を知覚することである。どんな物質にも、どんな面にも、どんな面のレイアウトにも、だれかにとって有益ないし有害なアフォーダンスが備わっている。」 （Gibson 1986:140）

2

アフォーダンスについて、もうすこし、詳しく見ていきたい。ギブソンにあって、実際にどのようなものがアフォーダンスとして考えられているか、ひとまず、ギブソンそのひとがあげている例を見ておきたい。

> 「もし地表面がほぼ水平（傾いておらず）かつほぼ平坦で（凹凸がなく）、十分にひろがっており（動物のサイズにくらべて）、また、それが堅い物質の表面である（動物の重量にくらべて）ならば、その表面は支持をアフォードする。それは支持面であり、私たちはそれを土台、地面、床の名でよぶ。それは、そのうえに立つことのできるもの stand-on-able であり、四足動物ないし二足動物に直立の姿勢を可能にする。それゆえ、それは、そのうえを歩くことができるもの walk-on-able であり、そのうえを走りぬけることができる run-over-able ものである。」 （Gibson 1986:127）

ふたつのことがいわれている。ひとつには、動物の在りかたに応じて、ある地表面が支持をアフォードする、すなわち、支持、直立、歩行、走行を可能にするアフォーダンスを有しているといわれていること。ふたつには、地表面のアフォーダンスが、動詞＋able のかたちでいいあらわされるということである。それぞれ、その意味するところを見ていきたい。

動物の在りかたに応じて、地表面が支持をアフォードするということは、ある動物には支持をアフォードする表面が、別の動物には支持をアフォードしないことがありうるということである。地表面ではなかなか想像しづらいので、いま仮に、水面を考えてみる。水面は、例えば、アメンボには支持をアフォードするが、私たち人間には支持をアフォードしない。ほかにも、ある高さの台は、成人したひとには座ることをアフォードするが、ほとんど歩くこともままならない幼児には座ることをアフォードしない。アフォーダンスがこうして、動物の種、あるいは、個体に応じてことなることは、どのような事物についてもいいうることである。ギブソンはいう、「アフォーダンスとは、動物とのかかわりにおいて規定される環境の性質である。」（Gibson 1982b:404）

しかし、動物の在りかたに応じて、事物のアフォーダンスがことなるとき、アフォーダンスはたしかに環境の性質であるといいうるだろうか。あるものがあるひとにとってはそうであり、別のひとにはそうでないとき、そのものはほんとうにそのように在るといいうるだろうか。そのものはただ、あるひとにとって、そう経験されているにすぎないというべきではないだろうか。そして、そうであるならば、アフォーダンスを特徴づける、動物に応じてことなるという相対性は、アフォーダンスが実在するというギブソンの主張と矛盾するのではないか。

アフォーダンスの相対性(13)について、ひとつたしかなことは、相対性と実在性が、元来矛盾する概念ではないということである。相対の対概念は絶対であり、実在ではない。したがって、アフォーダンスが動物に応じてことなることは、ただちにそれが実在しないことを帰結しない。けれども、矛盾しないことは、アフォーダンスが実在するという主張の正しさを証するものでもない。アフォーダンスが実在するというギブソンの主張の正当性は、ア

フォーダンスについていわれている、ふたつめの特徴に注目することで確かめられる。

ギブソンはアフォーダンスを、動詞＋able のかたちでいいあらわす。それはアフォーダンスが、事物にそなわったなんらかの力 power ないし潜在性 potentiality であることをしめしている。

事物にそなわった力ないし潜在性は、哲学において、しばしば傾向性ないし傾向的性質 dispositional property の名で呼ばれている。傾向性とは、その名がしめすとおり、性質をいうことばである。しかし、それをどう定義するかは、哲学者によってことなる。というのも、それは、性質というものをそもそもどのような在りかたをするものとして考えるか、さらには、さまざまある性質のうち、傾向性をどのように位置づけるかに左右されるからである。ただし、ここでは傾向性がおよそどのようなものをさしていわれることばであるかを知ることができればことたりる。私たちがいま知りたいのは、傾向性そのものについてではなく、アフォーダンスの相対性が実在性と矛盾しないということだからである。

イギリスの哲学者ティム・クレイン （Tim Crane 1962-） は、傾向性について簡明な、それでいて、どの哲学者もおそらくこれには同意するだろうという基本の定義を用意してくれている。すこし長くなるが、参照しておきたい。

> 「傾向性とは、つぎのような性質のことである。すなわち、その例化 instantiation が、その性質を具えた事物が一定の条件のもとで変化しうる would change ことをともなうような性質、あるいは、何かしらの変化をもたらしうる would bring about ことをともなうような性質（可溶性、壊れやすさ、伸縮性といった）のことである。例えば、なんらかのものが可溶的であると述べることは、それが水にいれられたならば溶けるだろうと述べることである。何かが壊れやすいと述べることは、それが（例えば）適当な状況において落とされたならば壊れるだろうと述べることである。何かに伸縮性があると述べることは、それが引っ張られたならば、伸びるだろうと述べることである。壊れやすさ（可溶性、伸縮性）が傾向性であり、壊れること（溶けること、伸びること）がその傾向性の顕在化 manifestation である。」 （Crane 1996:1）

例化や顕在化など、特異なことばがいくつか見えるが、いわれていることはそれほど難しいことではない。例化とは、事物がある傾向性を有することである(14)。傾向性を有する事物に共通することは、一定の条件のもとで、その事物にたいして何かが起こったときないし何かがなされたとき、ある出来事が生ずるということである。例えば、可溶性を有するものは、水にいれられたならば、溶けるという出来事が生ずる、そのような事物である。可溶性を有するものの典型例としては、砂糖がよくあげられる。傾向性の定義に、一定の条件のもとで、という留保が付されているのは、例えば、飽和状態にある水に砂糖を溶かしてみても、砂糖が溶けることはないからである。砂糖についていうならば、砂糖が水に溶けるという出来事が生ずることが傾向性の顕在化であり、砂糖が有する可溶性が傾向性である。

傾向性について、ふたつのことを指摘しておきたい。ひとつには、あるものの傾向性が定義されるさい、その定義には、ほかのものへの言及がふくまれること。ふたつには、傾向性の定義が、反事実条件法 counterfactual をもちいて述べられることである。

あるものの傾向性の定義に、ほかのものへの言及がふくまれることは、さきの砂糖の例にあきらかである。砂糖の可溶性の定義は、砂糖を溶かすところの水への言及をふくんでいる。このとき、水は、砂糖をいままさに溶かしている状態にあるものとして言及されているわけではない。それは、砂糖を溶かしうるものとして、とはつまり、砂糖の可溶性にたいして、砂糖を溶かしうるという溶解性を有するものとして、言及されている。水が有する溶解性は、もちろん、傾向性のひとつである。したがって、あるものの傾向性とは、その傾向性と対になる傾向性を具えたほかのものにたいして、あるものが有する性質であるということができる。けれどもそれは、あるものがある傾向性を有するためには、その傾向性と対になる傾向性を具えたほかのものが存在していなくてはならない、ということを含意しない。そのことをしめすのが、傾向性の定義にみられる、反事実条件法である。

傾向性の定義は、反事実条件法をもちいて述べられる。反事実条件法をもちいて述べられた文とは、「事実とは反対の状況を前件に据え、そこから一定の後件を導くもの」（グッドマン 1987:191）であり、ようするに、「前

件も後件も事実に反することを述べた言明である。」[15]（グッドマン 1987:205）

ふたたび砂糖を例にとるならば、砂糖の可溶性とは、水にいれられたならば、溶けるという出来事が生ずる、そのような事物の性質である。水にいれられるという出来事も、溶けるという出来事も、どちらも現実に、事実として生じているわけではない。ただいまここで生じている出来事ではないけれど、水にいれられるという状況を仮定するならば、そのときには、溶けるという出来事が生ずるだろうということを、傾向性の定義は述べている。すなわち、傾向性とは、たとえ顕在化していなくても、事物にその性質が潜在していることがみとめられる、あるいは、事物にその性質を帰することがゆるされる、そのような性質にほかならない。

砂糖の可溶性が顕在化するためには、水が存在していなければならない。けれども、たとえ水が存在していなくても、砂糖は可溶的である。というのも、砂糖が可溶的であるということは、それが、水にいれられたならば、溶けるだろうところのものである、ということだからである。あるものがある傾向性を有することと、その傾向性が顕在化することが区別されるべきものであること、それを反事実条件法はしめしている。（柏端 2017:169）

傾向性がこれまでに述べたような特徴を有するとするならば、アフォーダンスとは、まさに傾向性と呼ばれるにふさわしい。ギブソンがあげていた例は、支持を、したがって、直立を、歩行を、走行を、アフォードする地表面であった。いいかえれば、地表面とは、支持しうるもの、そのうえに立つことのできるもの、そのうえを歩くことができるもの、そのうえを走りぬけることができるものであった。このうちの、例えば、支持しうるということについていうならば、地表面が支持しうるものであるということは、その地表面が、重力の抵抗に耐えうる傾向性を有した動物がそのうえに乗ったならば、その動物を支えるという出来事が生ずる、そのような事物であるというにひとしい。そして、そのようにいうことはそのまま、地表面が動物を支持しうる傾向性を有するということにほかならない。直立、歩行、走行のそれぞれについても、支持と同様に、傾向性として理解することができる。

アフォーダンスを傾向性として捉えることによって、アフォーダンスの相対性および実在性は、このうえなくよく説明される。まず、アフォーダンスの相対性は、傾向性の定義が、対となるほかのものの傾向性への言及をふ

くむということから説明される。水面がアメンボには支持をアフォードし、人間には支持をアフォードしないのは、水面に浮かびうるという傾向性が、アメンボには具わっており、人間には具わっていないからにほかならない。

ついで、アフォーダンスの実在性にたいしては、つぎのように説明することができる。水面は、私たち人間には、支持をアフォードしない。しかし、それはただ、支持しうるものとしての水面のアフォーダンスが、人間にたいしては顕在化しないということにすぎない。支持しうるというアフォーダンスは、水面に潜在するものとして、水面に具わっているといいうる。事実、ひとはサーフボードをたずさえ、適切な技能を身につけることによって、波にのることができる。サーファーが波に乗るとき、水面はサーファーを支持している。

こうして、アフォーダンスを傾向性として捉える考えかたは、アフォーダンスを特徴づける相対性、および、実在性について、よく教えてくれる。しかし、そればかりではない。アフォーダンスを傾向性として捉えることで、アフォーダンスを知覚することが、私たちがふつうに「ものを知覚する」ということばから連想する内容とは、おおきくことなるものであることがあきらかとなる。

「ものを知覚する」というとき、私たちはときに、空間においてほかのものからはっきりと区別されるものを、時間の流れからは切りはなして意識するという、いささか静的な事態を連想する。けれども、環境を知覚することがアフォーダンスを知覚することであり、アフォーダンスが傾向性であるならば、環境を知覚することはこのような意味での「ものを知覚する」ことではありえない。それは、あることが起こるないしなされたならば、ある出来事が生ずるだろうという、可能な出来事の系列を知覚することにほかならない。

私たちは、たんに個個の物体のあいだに位置するというより、無数の可能な出来事の系列にとり囲まれている(16)。この出来事は、それを知覚し、それにたいして行動をなすところの、私たち自身をまきこんで顕在化する、そのような出来事である。ギブソンは、環境が、複数の物体が一個の物体をとり囲むしかたとはまったくことなるしかたで、動物をとり囲んでいること、環境がきわめて特別なしかたで、動物をとり囲み、とりまき、包囲していることを、幾度となく、くりかえし指摘する （Gibson 1986:43） 。このような

主張に秘められたギブソンの真意は、アフォーダンスを傾向性として捉えるときにはじめて、はっきりと理解されうるようにおもわれる。

3

地表面がそうであったように、ギブソンはしばしば自然物を例にとりつつ、アフォーダンスを説明する。しかし、すでに述べたように、ギブソンは人工的、社会的な事物にもアフォーダンスがあることを認める。ギブソンが語るのは、郵便ポストのアフォーダンスである。とはいえ、地表面のアフォーダンスを見るかぎり、その説明はいかにも素朴であり、アフォーダンスの概念は、ごくかぎられた意味での環境、すなわち、手つかずの自然環境に存在するものにしか適用されないようにもおもわれる。事実、これまでには、アフォーダンスの概念が人工的、社会的な事物にも適用可能であることを疑う議論が、数おおく提出されてきた。その論点は、およそつぎの三つに集約される。

ひとつには、郵便ポストの意味や価値を知るには、知覚とは別の、より高次の認識が必要とされるようにおもわれること。ついで、郵便ポストが郵便制度のある地域でのみ機能することが、郵便ポストの意味や価値の実在性を否定するようにおもわれること。そして、最後に、郵便ポストが有する規範性について、アフォーダンスの理論では説明しきれないようにおもわれること。この三つである(17)。アフォーダンスについてこれまでに述べてきたことを踏まえつつ、それぞれの論点に応ずることで、ギブソンの主張を擁護してみたい。

郵便ポストの意味や価値が知覚されることを否定する議論は、つぎのように進む。郵便ポストの意味や価値は知覚されない。というのも、見た目にそっくりな郵便ポスト、また、したがって、手紙を投函することができるという機能をもたない郵便ポストは、にもかかわらず、本物の郵便ポストと知覚的に識別されることがないからである。郵便ポストを郵便ポストとして同定することを可能にするものとは、郵便ポストの見た目ではなく、郵便制度をはじめとする、複雑な背景知識である。したがって、郵便ポストの意味や価値が知覚されることはない。

はじめに指摘しなければならないのは、あるものと別のものとが知覚的

に識別されないことは、あるものの意味や価値が知覚されないことを含意しないということである。例えば、ある地表面のとなりに、精巧に擬装された落とし穴が設置されることを考える。地表面と落とし穴とは、見た目にはなんら変わらず、したがって、知覚的に識別されることはない。しかし、そのことはけっして、私たちが地表面の意味や価値を知覚することができないということを証するものではない。それはただ、私たちがときに、知覚し誤ることがあるということを証するだけである。郵便ポストについても、見た目にそっくりな郵便ポストが、本物の郵便ポストと知覚的に識別されないことは、ごく当然のことであり、そのことはいささかも、郵便ポストの意味や価値が知覚されることを否定するものではない。

たほうで、郵便ポストを郵便ポストとして同定するには、郵便制度について、すくなくともいくらかのことを学習する必要があるということはたしかである。しかし、学習を必要とすることは、あるものの意味や価値が知覚されることを否定するものではない。例えば、毒性のある植物を見分けるためには、私たちはそれを学習しなくてはならない。しかし、そのことをもって、植物の毒性が知覚されないと結論するひとはいまい。ギブソンもまた、アフォーダンスの知覚が学習を必要とすることを認めるのにやぶさかでない。

問題は、それでは何をもって、あるものの意味や価値は知覚されるといいうるのか、ということである。ギブソンはいう、「アフォーダンスの理論の中心問題は、アフォーダンスが現実に存在するか、あるいは、実在するかということではなく、アフォーダンスを知覚するための情報が包囲光において入手可能であるかどうかである。」　（Gibson 1986:140）

ギブソンにあって、知覚は情報を介するとされている(18)。情報とは、それを介して、あるいは、それによって、何ものかが知覚されるもの、したがって、知覚を可能にするものである(19)。そして、この知覚を可能にする情報は、環境と動物とのあいだに、視覚の場合であれば、私たちを包囲する光のなかにあるとされている(20)。

ギブソンは情報 information が無形である formless ことを強調する。それは、形の語が、私たちの知覚が時間をつうじてなされるものであることを忘却させるからであり、また、光のなかにある情報を、環境に存在する事物の形を引き写した似像 image として表象することを禁ずるためである。ギ

ブソンによれば、情報とは、環境ないし環境に存在する動物自身を特定するもの specification であり、その写しではない （Gibson 1983:186） 。

情報がいかなるものであるかをしめすために、ギブソンは矩形の天板を例にとり、「動く観察点に投影されるなかで、何がこの硬い表面の形状を特定するのか」 （Gibson 1986:74） と問うている。そして、つぎのように答える、「さまざまな台形状の投影の集合にぞくする角度と比率とが変わりゆくことは事実だが、四つの角度のあいだに変わらない関係があること、そして、さまざまな投影の集合にわたって不変の比率があることもまた等しく重要な事実であり、この関係や比率が矩形の表面を一意に特定するのである。」 （Gibson 1986:74）

ここでは、情報が、私たち自身の動きのなかで立ち現れる不変の関係ないし比率であることが説かれ、それが一意に何ものかを特定することが述べられている。一意に特定するということは、そうした関係や比率が、偶然のものではなく、何かしらの法則にもとづくものであることをしめしていよう。情報とは、ようするに、なにものかを法則的に特定する関係ないし比率であるということができる。これは裏からいえば、何かしらの法則性がないところで、私たちは知覚するとはいえないということを意味する。

そのことは、実のところ、アフォーダンスを知覚するということそのもののうちにすでに含意されていたことであった。私たちはすでに、アフォーダンスが傾向性であることを見た。例えば、砂糖が可溶的であるといわれるのは、砂糖が何かのはずみで、偶然、何かに溶けるからではない。砂糖は、一定の条件を満たすかぎり、つねに水ないしそれに類する液体に溶けいりうるものである。そして、だからこそ、砂糖は可溶的であるといわれ、「…ならば」という条件法をもちいていいあらわすこともできるわけである。

ふたたび述べるならば、アフォーダンスとは、「動物とのかかわりにおいて規定される環境の性質」（Gibson 1982b:404） であった。しかし、それは、環境がある動物にたいして、何かしらの意味や価値を有するということを意味するだけにとどまらない。それは、環境と動物とが偶然でないしかたで、とはつまり、法則的に関係しているということを意味しているのである。したがって、郵便ポストの意味や価値が知覚されるかどうかということも、郵便ポストとそれを知覚する私たちとのあいだにそうした法則性が存するかどうか、より厳密には、そうした法則性が光のなかに利用可能なしかたで存

するかどうかということを基準に答えられなくてはならない。

そして、私たちはその問いにたいしてはっきりと、あると答えることができる。というのも、郵便制度があることこそは、まさに郵便ポストと私たちとのあいだに、偶然でない、法則的な繋がりがあることを証するものだからである。また、郵便制度を制定することは、たんにいくつかの規則を定め、それを文書に書きしるすことだけをいうのではない。それは道の整備をはじめとする、実際の環境の改変をつうじて、郵便局員による手紙の収集および配達といった無数の出来事を、円滑かつ規則的に発生させることでもある。この法則性ある出来事を、私たちはいつでも知覚することができる。いいかえれば、郵便ポストと私たちとのあいだに存する法則性は、光のなかに入手可能なしかたで存するといいうる。もちろん、私たちはそれをふつう、言語による伝達をつうじて知るわけであるが、だからといって、郵便ポストのアフォーダンスは知覚されるというギブソンの主張が否定されることはあるまい。

つぎの議論に進みたい。郵便ポストの意味や価値が実在することを否定する議論は、つぎのように進む。郵便ポストは、郵便制度があるからこそ、郵便ポストとして存在する。そのため、郵便制度のない社会に生きるひと、郵便制度を知らないひとにとって、郵便ポストは何かよくわからないもの、あるいは、せいぜいのところ、何ものかをいれることができるものでしかない。そのとき、郵便ポストの意味や価値が実在することは疑わしい。郵便ポストの意味や価値は、それを知覚するひとによって、たんにそのように経験されているだけであるというべきではないか。アフォーダンスは環境に実在すると、ギブソンは主張する。したがって、郵便ポストの意味や価値にたいして、アフォーダンスの概念を適用することはできない。

郵便ポストのアフォーダンスが実在するというとき、ギブソンは、郵便ポストの意味や価値が、郵便ポストと呼ばれるところのものから独立して、あたかもそれじたいが一個のものであるかのように存在すると、述べているわけではない。ギブソンがいわんとすることはむしろ、郵便ポストが実在するというごく単純なことである。それは、郵便ポストの意味や価値が、たんに私たちによって経験されるだけのものではないことを述べている(21)。

このような意味において、郵便ポストの意味や価値が実在することを否定するひとは、おそらくいまい。郵便ポストの意味や価値が実在することを

否定する議論にもっともらしさをあたえているのは、郵便制度のない社会に生きるひと、郵便制度を知らないひとにとって、郵便ポストが郵便ポストとして知覚されることがないという、郵便ポストの意味や価値にみられる相対性である。しかし、すでに確認したように、実在性と相対性は矛盾しない。あるひとにとってそうあるものが、別のひとにとってそうないことは、そのものが実在しないことをただちに帰結しない。郵便ポストの場合、あるひとにとって郵便ポストであるものが、別のひとにとってそうでないことは、ただべつのひとが郵便ポストのアフォーダンスを知覚することができないでいるというだけのことである。したがって、この議論もまた、郵便ポストにアフォーダンスの概念が適用されうることを否定するものではない。

最後に、郵便ポストの規範性がアフォーダンスによって説明されうることを否定する議論を検討して、この小論を終えることにしたい。ギブソンによれば、郵便ポストは、手紙を投函することができるものである。けれども、できることに注目するならば、郵便ポストは、手紙でない、ほかのものをいれることもできる。そればかりか、そのうえにのぼって、例えば、木の枝にかかった帽子をとることにも利用できる。しかし、そのように利用しうるからといって、うえにのぼることができるものを、私たちは郵便ポストとはいわない。すなわち、厳密にいうならば、郵便ポストとは、手紙を投函することができるものであるというより、手紙を投函することのほかにはもちいることのできないもの、手紙を投函するためだけにもちいられるべきものである。この、郵便ポストの規範性について、ギブソンは何も述べていない。郵便ポストの規範性は、アフォーダンスによってではなく、郵便制度によってこそ説明されるべきである。したがって、アフォーダンスの概念を、郵便ポストの意味や価値に適用することはできない。

たしかに、郵便ポストは厳密には、手紙を投函することができるものであるというより、手紙を投函するためだけにもちいられるべきものであり、そのことについて、ギブソンは何も述べていない。しかし、それはけっして、ギブソンの議論の不用意さをしめすものではなく、ギブソンには、そもそもそのように述べる必要がなかったからである。郵便ポストの規範性がアフォーダンスによって説明されうることを否定するひとたちは、アフォーダンスについて、つぎのふたつのことを見逃している。ひとつには、できることは、できないことと表裏一体であること。さらには、郵便ポストのアフォ

ーダンスが知覚されうる環境とは、いわゆる自然環境ではなく、ほかの人間も存在する社会環境であること、このふたつである。

まず、できることとできないこととが表裏一体のものであることから、述べたい。例えば、石ころを考える。石ころにたいして、私たちはいろいろのことをなしうる。持ちあげたり、投げたり、割ったりすることができる。けれども、石ころにたいしてなしうることは、無限にあるわけではない。石ころは紙のように裂くことはできないし、丸めることもできない。これは、できることがまずあって、できないことがそれにつけ足されるということではない。石ころにたいして何かをなしうるということはすなわち、そのことのほかには何もすることができないということである。石ころについていうならば、石ころは紙のような繊維質ではなく、裂くことができないからこそ、割ることができるのである。

何をなしうるかということは、こうして、何をすることができないかということと表裏一体の関係をなしている。したがって、アフォーダンスの知覚は、私たちの行動を可能にするものであると同時に、それを制御するものでもあるといわなくてはならない。郵便ポストをまえに、私たちはその意味や価値の知覚をつうじて、みずからの行為を制御している。しかし、それはなにも、郵便ポストについてのみいいうることではなく、実のところ、あらゆる事物についていいうることなのである。

これにたいし、そのようなことはすでに了解ずみのこととして、郵便ポストについてはさらに、なしうることが厳格に規定されていることが、その意味や価値を特別なものにしていると、考えるひとがあるかもしれない。事実、なかには、郵便ポストのアフォーダンスに、社会的 social ないし規範的 canonical の形容詞を添えて、アフォーダンス一般とは区別されるべきものであることを際立たせようとするひともいる(22)。しかし、このような議論の進めかたは、ともすればアフォーダンスの概念を曲解することにもなりかねないと、私にはおもわれる。かれらは、ギブソンのいう環境が、ほかの動物ないしひとをもふくんだ社会環境であることを見逃しているというのが、私の主張である。そのことを、これから説明したい。

「環境は動物をとり囲むものからなる」（Gibson 1986:7）けれど、「いかなる動物であれ、その動物をとり囲むものには、植物および無生物だけでなく、ほかの動物もふくまれる」（Gibson 1986:7）と、ギブソンはいう。

ギブソンのいう環境は、草木が生い茂るだけの、いわゆる自然環境ではない。それは、動物たちが住まい、生きて活動するニッチである。そこには当然、ほかの動物たちも存在する。

この、ごくあたりまえのことは、とかく見過ごされがちである。しかし、実のところ、ギブソンがデカルトふうの精神から出発することを放棄したことのうちにすでに含意されていたことであった。というのも、動物、環境という枠組みから出発するということは、我惟うにはじまり、我惟うにとどまりつづける、独我論の立場を放棄するということでもあるからである。ギブソンのいう環境には、「我」と「我」以外の事物とだけが存在するというわけでなく、ほかの動物もまた、「我」とおなじように存在している。ギブソンのいう環境ははじめから、動物たちの住まう共同世界であり、その意味において、つねにすでに、さまざまな動物たちが交流しあう社会環境であるといいうる。私たちは何よりまず、そのことを弁えておかなくてはならない。

私たちの住まう環境に、ほかの動物たちが存在するということは、ある事物のほかに、別の事物が存在するということではない。ギブソンはいう、

> 「生きて活動するものは、そうでないものからさまざまな点においてことなっているけれど、とりわけ、自発的に動くという点においてことなっている。ほかのすべての遊離物とおなじように、生きて活動するものは外力によって押されたり、動かされたりする。重力によって落下しうることもある。ようするに、受動的に動かされうる。けれども、生きて活動するものはまた、内力 internal force のおかげで能動的に動くことができる。」 （Gibson 1986:41）

> 「環境のもっとも豊かで精巧なアフォーダンスは、ほかの動物によって、私たちにとっては、ほかのひとびとによって差しだされる。[…] ほかのひとや動物は、ふつうのものとはまったくことなるので、幼児はかれらを、植物や無生物から区別することをほとんど瞬時に学んでしまう。ほかのひとや動物は、触られれば触りかえし、叩かれれば叩きかえす。すなわち、ほかのひとや動物は観察者と相互作用し、かれらどうしでも相互作用する。行動は行動をアフォードする。心理学および社会科学における全主題は、この基本の事実を精緻にしたものとして考えられうる。」 （Gibson 1986:135）

「ほかの動物が観察者にアフォードするものには、行動ばかりでなく、社会的な相互作用もある。たほうが動くにつれて、いっぽうも動くことで、いっぽうの行為は、一種の行動の循環 loop のなかで、たほうの行為に適合する。」（Gibson 1986:42）

ほかのひとや動物は、みずから動く。そのことは、そうしたほかのひとや動物が「触られれば触りかえし、叩かれれば叩きかえす」ということ、あるいは、一言でいうならば、「相互作用する」ということを意味する。相互作用するということが何を意味しうるかといえば、行動がさらなる行動を呼ぶというしかたで、行為が循環していくということである。この循環のうちに入りこむとき、動物の行為は、たんに事物に接するときにくらべていっそう制御されることになる。というのも、「触られれば触りかえし、叩かれれば叩きかえす」ほかの動物たちを、私たちはけっして、たんなる行為の手段としてもちいるわけにはいかないからである。

そして、ここで肝要なことは、私たちの住まう環境に存在する事物はふつう、こうしたほかの動物ないしほかのひととのかかわりにおいて存在するということである。人間の場合、ひとははじめ孤立した状態にあって、そこからさまざまなひとに出会い、社会化していくというわけではない。幼児は、はじめから父ないし母をはじめとする養育者に囲まれた状態で産み落とされ、育てられていく。もちろん、幼児ははじめから、ことばの厳密な意味において、だれかと相互作用するわけではなく、したがって、社会化しているわけではない。例えば、養育者ははじめ、幼児に要求されるままに、乳を飲ませたり、肌着を換えたり、あやしたりする。養育者はほとんど、幼児の都合のいいように動くだけである。そこに「相互」作用はない。けれども、幼児が這うようになり、みずから移動することができるようになれば、そういうわけにはいかなくなる。

幼児が階段に近づいたならば、たとえ実際に階段のさきへ進もうとはしていなかったとしても、養育者がそれにさきんじて手を添え、方向を変えたり、抱きあげたりして、幼児の行く手を阻むことがありうる。行く手を阻まれた幼児は、ときに泣きわめくかもしれない。しかし、そのときにも、幼児

が放っておかれることはないだろう。養育者は、未だことばのつうじない幼児にたいして、やさしいことばをかけながら首をよこに振ったり、階段とは別の方向を指差すか、幼児の気を引く玩具をちらつかせるかして、幼児の注意をそちらへ差し向けたりするにちがいない。このやりとりは、幼児と養育者、相互の行為が平衡状態へと収束するまで続けられることになるだろう。幼児は、こうしたほかのひとたちとのさまざまな相互作用をつうじて、事物の意味や価値を学習していくのである。

いま、郵便ポストにふたたびたちもどるならば、郵便ポストこそはまさに、こうしたひととひととが交流しあう環境において存在するものである。郵便ポストにたいして何をなしうるかを、私たちはほかのだれかに教えてもらうことによって学習する。私たちはこの学習をつうじて、郵便ポストが、じぶんにとってどうあるかということのみならず、ほかのひとにとってどうあるかということを学んでいく。私たちは、いわば視点を複数化し、ほかのひとと共に郵便ポストを知覚することを学習するのである。そして、そのときにこそ、郵便ポストに具わった規範性は了解され、私たちはほんとうの意味において、郵便ポストが存在する社会に生きはじめるといえよう。ギブソンはいう、「じぶんだけでなく、ほかのひとにとっての事物の価値を知覚するとき、ようやく、子どもは社会化しはじめる。」　(Gibson 1986:135)

このように考えることができるならば、アフォーダンスによっても郵便ポストがそなえる規範性について、すくなくともいくらかは説明することができるだろう。もちろん、事態はより複雑であるにちがいない。けれども、郵便ポストの意味や価値に、アフォーダンスの概念を適用することがまったくの誤りであるとはいわれないはずである。

人工的、社会的な事物といえば、自然物に比べていっそう、その意味や価値が、私たち個人の内部に、あるいは、そうした個人から構成される社会の内部に閉じているようにおもわれてくる。国がちがえばものの見かた、価値観はことなる、ということはいまや常識として、あらゆるひとに共有されていよう。そのとき、意味や価値を、主観的ないし間主観的なものとして、あるいは、社会によって構成されたものとして片付けてしまうならば、私たちはどこまでも互いに分断された世界のうちに閉じこもり、そのなかで生きていくほかないということが帰結しよう。しかし、いうまでもなく、現実にはあらゆる垣根を超えて、ひとびとは交流しあっている。交流があれば、当

然葛藤もある。

交流を断つということが実質として不可能である以上、私たちになしうることは、互いを理解しあうということのほかにはあるまい。アフォーダンスの理論は、多様な生の在りかたが事実として存在することが急速にあきらかにされつつあるなかで、そうした多様性と向き合わざるをえない状態にある現代社会に、ひとつの指針を与えてくれるものであるようにおもわれる。すでに述べたように、アフォーダンスの理論は、意味や価値が実在することを肯定する。それは、意味や価値がけっして個人ないし社会の内部に閉じられたものではないこと、かといって、そうした個人ないし社会を一挙に超越して、全体に否応なしに押しつけられるものでもないこと、私たちが望むならば、いつでもだれにとっても開かれたものとして存在しているということを説いている。郵便ポストの例はいかにも陳腐であるが、相対性、あるいは、多元性と実在性とを共に許容するアフォーダンスの理論は、ほんとうの意味で私たちが共に生きるということについて、すくなからぬ示唆を与えてくれるようにおもわれる。そして、その意味において、アフォーダンスの理論が人工的、社会的な事物に適用可能であるかどうかは、今後もより慎重に検討されなくてはならない。

注

(1) 本論におけるギブソンの著作からの引用は、いずれも私がみずから訳出したものである。参考文献には、邦訳書の情報を併記した。予め断っておく。

(2) 例えば、主観主義を裏返しにしただけの客観主義だとか、精神の存在をみとめぬ唯物論だとかいう批判がそれである。ギブソンの知覚理論に寄せられたさまざまな批判については、染谷　(2017)　が過不足なくまとめてくれている。

(3) このような批判のうち、柏端　(2017)　の論考には、教えてもらうことがおおかった。柏端は、アフォーダンスを傾向性として捉え、傾向性を内在的性質に分類する。そのうえで、郵便ポストにみとめられる、手紙を投函することができるという意味や価値を、内在的性質ではなく、外在的性質に分類する。そして、そこから、郵便ポストの意味や価値は、アフォーダンスではないという結論を導く。すなわち、すべてのアフォーダンスは傾向性であり、すべての傾向性は内在的性質であるから、外在的性質であるところの郵便ポストの意味や価値は、アフォーダンスではないというわけである。内在的性質、外在的性質の区分の基準を、柏端は主として、イギリスの哲学者ジョージ・ムーア

（George Edward Moore 1873-1958） による考察をてびきとしながら、独自のしかたで定式化している。簡単にいうならば、それは物体の複製によって、問題にされている性質が保持されうるかどうか、というものである。この基準のもとでは、郵便ポストの意味や価値はたしかに、外在的性質に分類される。郵便ポストそのものを複製したところで、郵便制度によって承認されないかぎり、その物体が郵便ポストとして機能することはないからである。しかし、内在／外在の区分は、物体の複製によってというよりむしろ、問題にされているものが「何であるか」によってなされるべきではないだろうか。郵便ポストと呼ばれる「物体」にとって、その意味や価値が外在することは当然のことであり、であるとするならば、複製にさきだってすでに、内在／外在の区分はなされてしまっているようにもおもわれる。内在／外在という区分のむずかしさについては、例えば、グッドマン （Goodman 1978:62） が指摘しているが、私にまだはっきりとした考えはない。柏端による指摘は今後の課題として、心に留めておきたい。

(4) 手紙を投函することができる letter-mailing-with-able ということばは、ギブソンそのひとによるものではない。ギブソンのアフォーダンスを傾向性として捉え、その含意をきわめてよく整理したスカランティノ （Scarantino 2003） によるものである。しかし、のちに述べるように、ギブソンは動詞+able の形で、アフォーダンスを記述しており、スカランティのことばはギブソンの意図に沿うものである。

(5) ギブソンの死後、かれの理論を継承、発展させた、いわゆるギブソニアンたちが、ギブソンの心理学説の哲学上の含意を、その根拠にまで遡って確かめなかったこともまた、このような誤解ないし偏見が横行したことの一因であると、私にはおもわれる。おおかたのギブソニアンたちは、いっぽうで、アフォーダンスを特定する情報を実験によって確かめ、それを数学のことばをもちいて定式化しようと試み、たほうで、進化論の延長線上にギブソンの理論を位置づけ、ギブソンの心理学説が進化論の知見と離反しないことを確かめることで、その有効性をしめそうとした。これらの試みは、ギブソンの心理学説に数学にもつうずる厳密さをもたらしたことにくわえて、ギブソンの心理学説にいっそうのたしからしさをもたらしたという意味において、意義あるものといいうる。しかし、何よりさきに問われるべきは、ギブソンがどのような根拠にもとづいて、みずからの理論を展開したか、あるいは、ギブソンの理論が正しいといわれる、その根拠は何であるかをあきらかにすることである。これは、実験によって答えられうる問いではなく、ほかの個別科学の成果を借りることによって答えられうる問いでもない。ギブソンの心理学説にかんする論考のうち、つぎのものには教えてもらうことがおおかった。Ben-Zeev （1984）、Heft （2003）、Kadar and Effken （1994）、河野 （2003）。

(6) ギブソンは著作のいたるところで、デカルトふうの二元論に言及し、それにもとづいた心理学説を精神主義 mentalism として批判している。デカルトの試みが、デカルトにとって実り豊かな成果をもたらしたことはたしかである。どのような試みといえども、その目的に言及することなしに、正しく評価されることはない。デカルトが何ゆえに、物心の二元論のもとで思考しなくてはならな

かったかについては、つぎの書物に詳述されている。ジルソン　(1975)、小林　(2009)。しかし、いうまでもなく、デカルトがそのように思考しなくてはならかったということは、私たちもまた、そのように思考しなくてはならないということを含意しない。

(7) デカルトの理説が克服不可能な困難をふくむものであることは、のちの歴史が証明するところである。その顛末については、つぎの書物に詳述されている。ジルソン　(1975)。

(8) ギブソンは、古代ギリシャの哲学者アリストテレス　(Aristoteles B.C. 384-322)　の魂 ψυχή / anima についての考えをおよその手本としながら、考察を進めているように、私にはおもわれる。すなわち、身体による活動を完成させる、身体の形相としての魂である。ギブソンは、随所でアリストテレスの名をあげているし、学生時代に師事したアメリカの哲学者エドウィン・ホルト　(Edwin Bissel Holt 1873-1946)　をつうじて、さらには、おなじくアメリカの哲学者ジョン・ランドル　(John Herman Randall 1899-1980)　による『アリストテレス』をつうじて、アリストテレスの学説に触れていた。ギブソンの心理学説を、行動主義ないし唯物論として理解しようとする試みは、このことを見逃している。こころの働きはときに、内、外といった空間を想わせる語を伴って表現されるが、ギブソンはそうした、ともすればこころを物化してしまうような表現を避けつつ、こころの在りかたを探ったというべきである。

(9) 可能性 possibility のほかに、ギブソンは機会 opportunity ないし効用 utility の語ももちいている。なお、行動の可能性といわずに、行為の可能性と述べたのは、アフォーダンスが動物のなしうること can do をいうものであることをいいあらわすためであり、他意はない。

(10) 行動は知覚と共に進行する。とはいえ、ギブソンは知覚という活動に、行動に資することに尽きない、固有の意義を見出している。それゆえ、知覚するという活動からみられたときの動物に、ギブソンは特別に、観察者 observer の語をあてる。観察する observe とは、見守る、遵守するという意味である。知覚することは、行動することとはことなり、何かを遂行する活動 performative activity ではない。そのことが観察ないし観察者という語には含意されているけれど、ギブソン　(Gibson 1966:46)　はべつのところで、知覚するという活動に、探索活動 exploratory activity の語を充てている。観察という語はときに、静止して、ただじっと見つめることを意味するから、ギブソンの語る知覚の動的な在りかたをしめすためには、観察、観察者という語より、探索 explore 、探索者 explorer の語がもちいられるべきかもしれない。

(11) 利用可能 available とは、かならずしも活用できる useful という意味ではない。行為の手段となりうるという意味である。アフォーダンスがかならずしも有益なものであるとはかぎらないという批判がすでになされている　(河野 2003:87)　ので、誤解のないように述べておく。

(12) ギブソンそのひとによって、こうしたことがいわれているわけではない。また、道具ということばは、いくらか誤解を招く表現かもしれない。というのも、それはひとの手によってつくられたものを連想させるからである。いうまでもなく、環境は、ひとの手によってつくられたものだけからなるわけではな

い。けれども、環境が私たちの行為にとって利用可能な手段として存在しているという意味において、道具ということばをもちいることは、それほど的をはずしているとはいえまい。世界内存在たる人間にとって、世界はひとまず手元にあるもの、道具として現れると述べたのは、ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー （Martin Heidegger 1889-1976） である。ギブソンの心理学説とハイデガーの思想との親和性を述べたものとして、つぎの論文を参照。Kadar and Effken （1994）、村田 （2002）。

(13) これまでに提出されたアフォーダンスの解釈およびその問題点については、佐古 （2008） および染谷 （2017） が詳細に述べている。アフォーダンスを傾向性として解釈するもののうち、つぎの論考には教えてもらうことがおおかった。柏端 （2017）、河野 （2003）、Scarantino （2003）。また、本章におけるアフォーダンスの解釈は、これら三つの論考に負うものである。

(14) より正確にいうならば、複数のものに述語されうるもの、すなわち、一般者たる性質が、個物に具現することである。したがって、一般者ないし普遍の実在を認めぬ唯名論者には、このような定義は受けいれられるものではないかもしれない。しかし、そのことはここではとくに問題にならないので、ひとまずおく。

(15) これらは共に訳者雨宮民雄による「訳者解説」からの引用である。反事実条件法の平明かつ過不足のない定義として引用した。

(16) 河野は、アフォーダンスの知覚を事象の知覚として、ギブソンの心理学説の根底にある存在論を過程の存在論として、それぞれ捉えることを提案している。（河野 2003）

(17) これら三つの論点は、ギブソンの見解にたいするこれまでの批判を私なりに整理したものである。それぞれが別個のひとによって提示されているというより、互いに深く結びつきながら、ギブソンの見解を否定するすべてのひとの意見に、多少ともふくまれているものである。例えば、つぎの論考を参照。Costall （2012）、中島 （1997）、長滝 （1999）、Schmitt （1987）。

(18) したがって、アフォーダンスの知覚は、厳密には、二項関係でなく、情報を介した三項関係である。つぎの論考を参照のこと。Windsor （2004）。

(19) したがって、情報そのものが知覚されることはない。情報は道具のように、利用されるものである。晩年、ギブソンは知覚と認識とのちがいをあきらかにしようと苦心していたが、情報を利用するだけでなく、情報そのものを知識の対象としうるかどうかというところに、知覚と認識とのちがいがあるようにおもわれる。

(20) このときにいわれる光は、ふつうにいわれるところの光ではない。私たちが何かを知覚しているという事実から遡って、それを可能にするものとして考えられるところの光である。ギブソンは、そのような光の在りかたが、たんなる思弁によって説かれるだけのものではなく、自然科学によっても探求しうるものであることをしめそうとして、できうるかぎり科学のことばをもちいて記述した。しかし、そのことは一面において、ギブソンの理論が唯物論ふうに、誤って解釈される風潮を用意したようにおもわれる。ギブソンのいう光について、つぎの論考に教えてもらうことがおおかった。植村 （1987）。

(21) ギブソンはしばしば主観的でない not subjective ないし客観的である objective の表現をもちいるが、主観、客観、共にきわめて含蓄に富んだことばであり、記述を煩雑にしかねない。また、実在的であると、主観的でない、ないし、客観的であるとのあいだには意味のズレがある。実在性と、非主観性および客観性とを同一のものとして扱うことは、主観–客観の二元論を前提とする近代哲学の枠内にとどまることを意味する。それゆえ、本稿では極力使うことを避けた。

(22) 例えば、コスタル （Costall 2012） はそう論ずる。誤解のないように述べておくと、私はこのような扱いそのものが誤りであるとはおもわない。それは、アフォーダンスを細かく分類し、それぞれの差異をきちんと捉えるのに寄与しうる。しかし、それはときに、社会的、規範的なアフォーダンスをそうでないアフォーダンスから、もはやそれらが共にアフォーダンスであるといわれうることが疑われるほどに区別しすぎることになりかねない。

参照文献

BEN-ZEEV, A. 1984. The Kantian revolution in perception. *Journal for the theory of social behavior* 14(1):69-84.

Costall, A. 2012. Canonical affordances in context. *Avant: Trends in Interdisciplinary Studies* 3(2): 85-93.

Crane, T. 1996. Introduction. In Armstrong, D. M., Martin, C. B. and Place, U. T. *Dispositions: a debate*, pp. 1-11. Routledge.

Kadar, E. and Effken, J. 1994. Heideggerian Meditations on an Alternative Ontology for Ecological Psychology: A Response to Turvey's (1992) Proposal. *Ecological Psychology* 6(4):297-341.

Gibson, J. J. 1982a. On the new idea of persistence and change and the old ideas that it drives out. In Reed, E. & Jones, R. (Eds.) *Reasons for realism: Selected essays of James J. Gibson*, pp. 393-396. Hillsdale, NJ: L. Erlbaum.

—— 1982b. Notes on Affordance. In Reed, E. & Jones, E. (Eds.) *Reasons for realism: Selected essays of James J. Gibson*, pp. 401-418. Hillsdale, NJ: L. Erlbaum. （ジェームス・ギブソン 2004. 「アフォーダンスに関する覚え書き」 境敦史、河野哲也訳 『直接知覚論の根拠』 pp. 337-363、 東京: 勁草書房。）

—— 1983. *The senses considered as perceptual systems*. Westport, Conn.: Greenwood Press. (Originally published in Boston: Houghton Mifflin, 1966) （ジェームス・ギブソン 2011. 『生態学的知覚システム　感性をとえなおす』 佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之訳 東京大学出版会。）

—— 1986. *The ecological approach to visual perception*. New York, NY: Psychology press. (Originally published in Boston: Houghton Mifflin, 1979) （ジェームス・ギブソン

1985.『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻共訳 サイエンス社。）

Goodman, N. 1978. *Ways of worldmaking*. Indianapolis: Hackett Publishing.

Scarantino, A. 2003. Affordance Explained. *Philosophy of Science* 70: 949-961.

Schmitt, B. H. 1987. The ecological approach to social perception: a conceptual critique. *Journal for the theory of social behavior* 17:265-278.

Windsor, W. L. 2004. An ecological approach to semiotics. *Journal for the Theory of Social Behaviour* 34(2):179-198.

植村 恒一郎 1987.「知覚の本性について 我々は過去を見るのか」 『哲學雑誌』 102(774):107-125。

柏端 達也 2017.『現代形而上学入門』 勁草書房。

グッドマン、 N. 1987.『事実・虚構・予言』 雨宮民雄訳、勁草書房。

河野哲也 2003.『エコロジカルな心の哲学 ―ギブソンの実在論から』 勁草書房。

小林 道夫 2009.『科学の世界と心の哲学』 中央公論社。

佐古 仁志 2008.「アフォーダンスの構造: 生態記号論に向けて」『年報人間科学』 29(1):133-148。

ジルソン、 E. 1976.『理性の思想史 哲学的経験の一体性』 三嶋唯義訳、行路社。

染谷 昌義 2017.『知覚経験の生態学 哲学へのエコロジカル・アプローチ』 勁草書房。

中島 英司 1997.「生態学的アプローチと現代唯物論の知覚論」 梅林誠爾・河野勝彦編 『心と認識 −実在論的パースペクティブ』 pp. 1-47、昭和堂。

長滝 祥司 1999.『知覚とことば 現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い』ナカニシヤ出版。

村田 純一 2002.「意識の「世界内存在」と「空間性」 −フッサール・ハイデガー・ギブソン」 門脇俊介、信原幸弘編 『ハイデガーと認知科学』 pp. 121-148、産業図書。